

園長通信

(令和7年度2月号)

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園
園長 岡部 祐輝

【新たな生活に向けての期待】

3学期に入り、日々子どもたちの遊びもクラスの興味関心に沿った個性あふれる活動や、環境がたくさん見られる日々となっています。年長クラスの廊下を歩いていると、廊下に新しい環境がありました。



黒板、ランドセル、教科書、机・・・など。

小学校の教室や授業を想起する環境があり、そこで、子どもたちは様々に会話をし、遊んでいました。

「今から1時間目を始めます（起立しながら）→（5分後）1時間目終わります！（めちゃ早っ!）」

「次は体育だから、着替えてくださいね!」

「教科書を読みます。～は～で・・・」

周りにある環境や道具、備品を活用しながら、それぞれが考える、またきょうだいや知り合いの小学生から聞いた情報をもとに、それぞれが先生役や児童役など役割分担・調整をして楽しんでいます。



実際の教科書を置いており、子どもたちが授業ごっこで使用しています



ランドセルの中に何を入れようかなと考えているようです

年長の子どもたちにとって、「小学校」という次のステージのイメージが期待や楽しみなど、肯定的に高めていくことがこの3学期はとても大切だと考えています。

【アプローチ期とは？】

年長3学期の期間は、小学校と接続する大切な期間となっています。時折、幼児教育の役割が、「小学校で困らないようにしつけをする」、「小学校の前段階の知識を早くからつける」ことが求められている場とされている方がおられますが、これは大きく認識と実感が異なります。

現在国では、「**幼保小の架け橋プログラム**」というものが議論されています。これは、「**子供に関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子供に学びや生活の基盤を育むことを目指すもの**」（文部科学省）とされており、全国のモデル地域で先行的に取り組みが行われており、徐々にその成果や課題が挙がってきています。

特にこの3学期は、「**アプローチ期**」と言われる小学校に期待やあこがれを高め、これまで遊びや生活の中で培ってきたことが小学校につながっていくんだということを経験的に感じる事が大切であると園では考えています。「何をさせるか」という活動ベースで考えるのではなく、「**何が育つか**」などを大切にする、**幼児教育の考え方をベースとした「アプローチカリキュラム」**というものを当園でまず検討し、それに沿って、年長の学年のねらいなどを話し合い、活動を展開しています。

今後、このような園が取り組む「**アプローチカリキュラム**」と、小学校1年生の1学期スタート時期に今後取り組みが広がっていくであろう、「**スタートカリキュラム**」がうまくつながり、子どもたちの培ってきたことがつながり、進化・深化したり、主体的・肯定的に学ぶことができる状況を作ったりすることができるために、近隣小学校の方々とも連携を深めたいと思います。

先日も、近隣小学校にお世話になり、教室での授業の様子を参観させていただきました。実際の様子を見た子どもたちは、改めて小学校への期待、授業へのワクワク感などを高めたことと思います。

【早くから授業スタイルになれることが幼児教育なのか？】

当園では、遊びを中心とした活動を中心に保育を考え、子どもたちのやってみたいを形にしていけるように考えています。これは当園だけではなく、現在の日本の幼児教育の中で重視されている考え方です。（詳しくは過去の園長通信をご覧ください）

しかし、年長3学期になると、いよいよ小学校生活が間近となり、どうしても勉強のこと、友達関係のこと、給食のことなど小学校で存在する物事への期待と不安が入り混じることがあります。このような時に、早くから、いわゆる「大人がすべて説明し、統制を取るしつけ的なことを重視する教育・保育」や、「早期に知識や技術をたくさん詰め込み、小学校入学時点でひらがなが書けたり足し算ができたりなど、学習をリードできる学びをしていること」などの姿が子どもたちに見られると、安心するという声を聞いたり、それらをしていることが王道の幼児教育とされている方もいますが果たしてそうでしょうか。

以下、ご一読いただければと思いますが、「**学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について ～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～**（中央教育審議会,令和5年）」では、次のように記述されています。

一方で、**遊びを通して学ぶという幼児期の特性に関する認識が、社会的に共有されているとは言い難く、幼児教育については、いわゆる早期教育や小学校教育の前倒しと誤解されることがある**。例えば、現在、令和3年答申を踏まえ、小学校以降においては1人1台端末等を日常的に活用し、「**個別最適化学び**」と「**協働的な学び**」を一体的に充実することが求められているが、**小学校以降の教育を見通すことと前倒しをすることは違うことに留意しながら、幼児教育の充実を図ることが求められている**。

この文書からも分かるように、幼児教育は「遊びを通して学ぶ」であり、小学校以降の「教科教育」を中心とした学び方とは異なることがわかります。この学び方の違いに、ブリッジ（橋）をかけるように、この幼保小架け橋の取り組みが重要であるとされています。決して、小学校教育の学び方を幼児教育に早くから落とし込み、授業のように進めていくことが施設として求められているわけではないという認識をお持ちいただければと思います。

【学びに対して意欲を持つ・問いを持つということ】

私は、かつて公立小学校教諭として1年生担任をし、入学後の子どもたちと1年間、クラスの中で共に生活をしました。その中で大切だと感じたことは、「**学びへの意欲を持つことができるか**」（**学びが楽しい・肯定的な思いになっているか**）、「**自分で問いを持つことができるか**」ということがあります。

前者の「学びの意欲を持つ」ということは、**大人が一方向的に学びや機会を与えたり、大人の都合で声をかけたり誘導したりするだけの保育では、意欲を持つことができません**。往々にしてこのようなスタイルでは、「**大人の物差しで評価をされる**」、「**子どもの声を聴いているようで聞いていない**」ということが起こり、結果として、「**どうせさ・・・**」、「**たぶんできない・・・**」などのところからスタートしてしまうようになりますことがあります。意欲を持つためにも、自分が「不思議だな」、「気になるな」というワクワク、ときめく機会を自分のタイミング・方法で持つことがどれだけできたか。またその時に、そのことがどれだけ意義深いことだと周りの大人が寄り添ってくれたかということが大切になります。これらを踏まえ、当園では子どもの姿やつぶやきから、保育室それぞれに子どもたちのアイデアが詰まった環境があるということになります。ただ、子どもが好きそうだからという理由だけで、玩具や環境を用意しているわけではありません。



多様なイメージを出し合う中で、互いの「やりたいこと」を調整する経験になります。これは自由に遊ぶ中で身につくことが多くあります。

そして後者の「自分で問いを持つ」ということは、特にこれからのAIと向き合う社会の中で大変重要とされる視点です。問いというものは、「質問」とは性質が異なります。「**なぜそうなるのだろう**」、「**これをこうしたらこうなるのではないか**」など、疑問・仮説などから、問いが生まれ、その問いをもとに探究・探求していくプロセスが幼児教育でも学校教育でも重視されています。

この「問い」についても、一斉一律に持たせることではなく、一人一人の問い、たとえ似通っていても、それぞれの文脈・切り口で問いを持ち、語るという経験が、学びへの構えを作っていきます。この問いは「**持たせる**」のではなく、**環境やヒトと人とのかかわりの中で創られていくことが大切であると考えており、当園では「環境から働きかけられている」、アフォードするという考え方のもと、そのきっかけとなる環境や遊びのコーナーを作っています**。保育者が子どもの遊びやこれまでの経過をみて、子どもたちに自然な流れで遊びの中に入り込むような環境を考えています。まさに「**環境に意図を込める**」という形で、進めています。



これまでの活動の中で、「単位」や「重さ」に興味を示し、計測できるコーナーで自分で試しています

このようにこれまでの幼稚園では遊びを通してたくさんの学びのタネ、きっかけを育んできました。3学期のアプローチ期に少しずつ小学校の生活の香りを感じながら、憧れと期待を持つだけでなく、「これまで超えてきた自分なら、これからも超えていけそう」というポジティブな見通しも経験的に培っていけるよう援助したいと思います。

この続きは、3月の「進学進級説明会」でお話ししたいと思います。在園の保護者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。